

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

- 地元を想う若者たちと共に 1
- 特集Cambodia 伝えたいアジアのこころ 2~3
- Laos 支援地報告 4
- Nepal マンガルトールは私の学びの場 5
- 東日本大震災復興支援報告 6
- 「生活クラブ40・30まつり」で地球の木アピール 6
- 考道山「復興支援チヂミ」作りに参加 6
- 「マジカルバナナ」小学生バージョンを作成 7
- 地球の木20周年記念 連続講座 7
- 活動日誌 7
- INFORMATION 8

東日本大震災復興支援

地元を想う若者たちと共に

理事 堀 千鶴

3月11日、東日本大震災が起こったあの日から、半年が過ぎようとしています。

地球の木は、緊急理事会を3月25日に開催。「地球の木緊急支援活動方針」に基づき、東北で国際支援活動をしている国際ボランティアセンター山形（IVY）が中心に立ち上げた「東北広域震災NGOセンター」に参加して緊急支援を開始しました。支援金や緊急支援物資を送付し、4月には直接、支援物資を持参して現地を訪問。5月には石巻、気仙沼を視察し、海外の緊急支援でおこなわれている支援の仕組みを取り入れた「キャッシュ・フォー・ワーク」への支援をおこないました。この視察の時に「炊き出しができないか……」という現地の声を聞き入れ、5月末から、支援地を宮城県気仙沼市に絞り、IVYの気仙沼チームに直接協力する形で炊き出しを始めました。

横浜といえばシューマイや杏仁豆腐？

炊き出しといえば、メニューは豚汁などの汁物やカレーがほとんどだそうです。何か他のものでというリクエストを受け、シューマイや杏仁豆腐などを用意し、避難所となっているお寺で50食の炊き出しをおこないました。生活クラブの食材などを使って、次々とメニューを変えながら7月初旬まで計5回実施しました。（詳細は6ページをご覧ください）

現地の人たちに少しでも元気になってもらえたら……と始めたこの炊き出し、ボランティアの皆さんに協力をいただきながら、IVY気仙沼の若者たちとの協働で、理事が中心となって交代でおこないました。また、こうして気仙沼へ通っているうちに、いろいろな現地の生の情報を聞くこともできました。そして、現地からの要望を受け、会員の皆さまのご協力が集まった夏物衣料の提供や避難所の人たちへのタオルケットの配布など、きめ細かな支援へと広がっていきました。

地元気仙沼を何とかしたい

この活動の中心は、IVY気仙沼のメンバーです。自分達が



階上小学校にて夏物衣料の販売をする筆者

被災しながらも地元の為に必死に活動する若いメンバーとの出会いで、私たちも元気をたくさんもらいました。彼らの中には仕事を失ったメンバーも多く、家や家族をなくした人もいます。しかし彼らは、自分の住み暮らす地元、気仙沼をこのままにはしておけない、何とかしなければならぬと自らが感じ、行動しているのです。そんな様子が、現地を訪れるたびに強く感じられました。言葉として多く語る訳ではありません。まだまだ触れてほしくない部分もたくさんあると思います。その様な中で一緒に話をしている時にフッと本音を話してくれる彼ら。将来についても、「こんな事がしてみたい」「こんな街にしていきたい」と、聞いている私達がびっくりするくらい話をしてくれたりもします。このやる気と行動を、これからもサポートできる事は、私達にとっても活動の原点を見つめる良い機会としてとらえています。

また、自分たちの地元に関心を寄せ、将来を描き活動する若者に出会い、私たちにできることは何か、そして彼らに「NPOの活動が地域を変える力を持っている」という事をどの様に伝えていけばいいのか、考える機会を与えられたと思います。

そして、私達は今、自分たちが住み暮らす街について、もう一度見直し、将来のまちづくりについても考えなければならない時なのではないかと考えます。

会員の皆さまには、多くの募金や衣料をお寄せいただき、本当にありがとうございました。今後も、ご理解とご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

「シルクプログラム」 伝えたいアジアのこころ

5年目を迎えたクメールシルクプログラムはタケオの職業訓練センターで、子どもたちによりそって支援を続けています。クラフトグッズの注文生産を行いながら、技術指導やマネージメント能力の向上に協力しています。

6月29日、センターに着くといつものように子どもたちと織物のライム先生が笑顔で出迎えてくれました。見慣れた生徒11名のほかに新しい子どもたちが増えていました。ソテビー先生によると、付近の村から特に生活が困難な家の子どもたちを新しく入れていて、22名になっているとのことでした。

昨年度の生活クラブの共同購入で、このセンターの訓練生たちが織ったショールを販売するという企画は、日本では、「織り手の顔が見える」と好評でした。カンボジアの作り手の側からすると、各デザインのショール100枚ずつを全員で織る、という進行の仕方には改善すべき点もあるようでした。同じデザインのショールを、来る日も来る日も織り続けるというのは、技術の習得だけを考えれば良いやり方ではありますが、若い訓練生の創造性を発揮する場をなくして、「織る楽しさ」を損ねることになりやすいと考えました。そこで、今年度は、新しいプログラムを始めることにしました。



真剣に色やデザインの打ち合わせをする

目標は、一人ひとりに注目して、技術やデザインセンスの向上を見えやすくしていくことです。新入生はまだ糸に慣れる、という段階なので、センターに来て1年以上経った11名の生徒たちに、ひとり5枚のショールをそれぞれ独自のデザインで織ってもらうことにしました。縞の色の配分をあれこれ考えるなど、デザインの可能性を追求する体験をして欲しいと思うのです。

このセンターでは、訓練生にはショールが売れると1枚につきいくらか、お金を渡すことになっています。そのお金を学費にして高校にまで進めた訓練生が何人かいます。平均的には小学校3～4年生で学校を終わってしまう子どもが多い地域なので、このセンターの存在が役立っているこ

とがわかります。今まではうまく織れたものもそうでないものも同じ金額で買い取っていましたが、今回は良く織れたショールには段階的に評価し、高めの金額で買い取ることにしました。集まってもらった生徒たちにこの新しいプログラムについて説明すると、今までになかったほど目を輝かせて膝を乗り出して聞いてくれました。その後、一人ひとりに、この取り組みについての意見を聞きました。心配そうな顔や、意欲満々な顔、いろいろでしたが、「どんな色にするかまず考える」という意見が多くて、なるほど、この子たちはまず色から発想するのだなと思いました。皆「がんばりたい」と話してくれたので次の訪問が楽しみです。

このプログラムのために必要な絹糸は、今回から連絡係になったタリーさんから新しく紹介された店で購入しました。糸の種類も豊富な店で、糸による質感の違いなどこれからの作品づくりもいろいろと展開できそうです。今までは、センターで使う絹糸は必要な糸の半量くらいを先に渡していましたが、糸もずいぶん値上がりしているので、センターに負担になっていることを考えて、先に全量を渡すことにしました。

また、センターのお昼ごはんのためのお米も援助することにしました。今までも行く度に50キロ程持っていましたが、やはりセンターの運営にお米は必要と考えて一ヵ月50キロ分位を支援していきたいと考えています。

昨年よりも子どもたちが多くなって活気の戻ったセンターでした。先輩の訓練生たちが、よく新入生たちの面倒を見ていました。みなほんとうに仲良くやっています。子どもたちが張り切って楽しく織物を学んでくれたらと願っています。(クメールシルクチーム 大藪明恵)



少しずつ自信をもつようになった少女たち

現地でプログラムを支える人たち



新しく連絡係となった
ハイ・タリーさん。日
本への留学経験もある



センターの責任者ソテビー
先生と二人の息子



織物のライム先生と筆者の大藪さん



初めの頃から通訳を
してくれている
チャンタイさん

こんにちは！皆さん

王立ブノンペン大学外国語学部日本語学科で日本語を教えているハイ・タリーと申します。大学生の時の夢は日本語学科の教師になりたかったです。大学を卒業してから、日本語学科で教えるために試験を受けました。やっと大学生の時の夢は叶って、すごくうれしかったです。去年の9月からなので、教える経験はまだまだです。いい教師になるように、毎日がんばっています。例えば、教材を作ったり、様々な本を読んだりしています。それだけでなく、現在、教師として学生とうまくやりとりできたら、もっといいと思っています。

ところで、去年初めてセンターへ行行って、とてもびっくりしました。センターの子たちは皆まだ若いのに、きれいなスカーフを作れるんです。そして、皆はスカーフを織りながら、学校に通っています。最後に、地球の木をお手伝いできてとてもうれしいです。自分もカンボジアの伝統的な緋やスカーフについて少し分かるようになりました。いい勉強になります。どうぞよろしくお願いします。

地球の木のクラフトグッズで幸せを分かち合いましょう！

母から娘に……世代を超えて受け継がれてきたアジアの手仕事。地球の木では、生産者の暮らしを支えると同時に、彼女たちが誇りを持って生きていけるように、同じアジアの一員として、その素晴らしさを伝え、応援していきたいと思ひます。地球の木で販売しているクラフトグッズは、生産する人たちもハッピー、それを買う私たちもハッピーになれるような「しあわせを分かち合う」トレードです。WFTO（世界フェアトレード機関）が定める「フェアトレード基準」(*)を尊重し、現地の暮らしや伝統・文化を大切に「手作り」の良さをいかしたぬくもりのある「ものづくり」を目指しています。

■ 生産者は次の二つのパートナーです。

1. プログラムパートナー

(クメールシルクプログラムのパートナー)

生活向上支援のプログラムとして、クラフトグッズの生産・販売をおこなっているグループ・団体。団体の自立を目指したサポートも同時におこなう。

当該パートナー：VCAOタケオ職業訓練センター、MDSF (HIV陽性女性たちの生活支援の工房)

2. フェアトレードパートナー

生産体制や、マネージメントでも自立している団体。その団体から購入をすることで、生産者の暮らしを支える。情報交換をおこない、生産者の様子や事業の状況を把握できるようつとめる。

当該パートナー：「PEACE」「NCDP」などのNGOショップ (ハンディキャップのある人たちの生活支援を行っているグループ)



* WFTOが定める「フェアトレード基準」

1. 生産者に仕事の機会を提供する。
2. 事業の透明性を持つ。
3. 生産者の資質の向上を目指す。
4. フェアトレードを推進する。
5. 生産者に公正な対価を払う。
6. 性別に関わりなく平等な機会を提供する。
7. 安全で健康的な労働条件を守る。
8. 子どもの権利を守る。
9. 環境に配慮する。
10. 信頼と敬意に基づいた貿易をおこなう。

日当を通して見るNGOと村びと

地球の木会員の皆様、こんにちは。日本国際ボランティアセンター（JVC）ラオス事務所の平野です。ご支援いただいているラオス・サワナケート県における森林保全と持続的農業の活動に関連して、今回は「日当を通して見るNGOと村人」について書いてみます。

先日別のNGOの職員に、JVCでは村で研修を実施した際に村人に日当を払っているのかを聞かれました。こちらが村に向いて、2〜3時間程度の研修を行った際に日当を支払うことはありません。泊りかけでの研修では、日当を払います。泊まらないまでも、研修のため別の村まで出向き、自分の村まで帰る頃にはご飯の時間を逸している、というようなときは、みなで研修地の村でご飯を食べることはあります。

理屈を言えば、NGOは村人のためになる研修を行っているわけであり、日当を支払うのは本末転倒な話です。しかし現実には、研修を受けたからといって、その技術が使えない場合や、使えても効果が出るのは先、という場合があります。もっといえば、人権やジェンダーなど、そもそも生計向上を目的にしているわけではない研修も存在します。研修に出ていなければ、その時間に農作業をしたり、小動物や魚を獲ったりすることもできるわけですから、日当の必要性が生じる場合はあるでしょう。

しかしながら、その団体は研修に参加した村人に毎回日当を支払っており、これでは研修参加の目的が日当になってしまう可能性があります。私たちの対象村では、日当の支払われる県外への視察などを経験したある村の村長が、隣村に行くのにも日当を欲しがり、「日当をもらえないなら、JVCと活動するのは難しくなる」などと言ったことがありました。すると農業チームリーダーのフンパン兄さんが、「日当にばかり興味があるのなら参加しなくてよい。活動に関心がある人が参加すればよい」と言い切りました。

「ああ、立派だな」という思いが8割、あとの2割は「とは言えずいぶん強く出たな」と少し不安に思った私でしたが、その村長はその後非常に活動に熱心になっており、自分だけでなく、周りの村人に勧めて一緒に取り組んでいます。その後もJVCと関わる中で、彼の中で色々と変化がおこったようです。NGOは支援する側であり、お金や資材などを持っているのもNGOの側です。一方で、村人が参加してくれないと活動もできず、支援して下さる方々の期待にも応えられないのも事実です。そのため、村人のご機嫌取りをするようになる団体もありますし、実際村人だったたかです。そんな微妙な関係ですが、フンパン兄さんのようなしっかりしたスタッフを持つ／育てることが肝要でしょう。

（JVCラオス事務所現地代表 平野将人）

※フンパンさんは、2009年日本のアジア学院で一年間の農業研修を受けています。地球の木もその費用を一部負担しました。



後輩のセンスリーとフンパン兄さん（右）

モン族の村を訪ねて

いつも地球の木がおまつりなどで販売しているモン族の手工芸品。代表的なのは、「クロスデッチ」の刺繍品と「生活の様子を描いた」刺繍品で、その緻密さ、色合いの美しさは私たちの心をひきつけます。いったいどんな人たちが作っているのでしょうか？



子どもたちに
絵本を読む
安井さん

「ラオス森の絵本」の取材旅行で昨年12月に絵本作家の川島さんと一緒に、通訳としてラオスへ同行して下さった安井清子さんに、今回案内いただきました。7月3日、ラオスのモン族の村、シビライ村を訪ねることが出来ました。安井さんはモン文化を研究しているエッセイストで「ラオス山の子ども文庫基金」も主宰しています。シビライ村にもこの文庫がありました。

ピエンチャンから車で北へ約2時間、途中で山道となりしばらく行ったところに村があります。42家族、256人の小さい村で、難民だったモン族の人たちが帰還して作った村だそうです。「こんなところにどうやって住むの？」と安井さんが思ったほど、何もなかった山の中に、一から皆で村を作ったのだそうです。モン族はもともと焼畑をおこない自然と共に暮らしてきた人々ですが、ここでは、山を開いて畑を作り生活をしています。十分ではない農地で暮らしていくために、女性たちは刺繍品を作り生活を支えています。

ラオスでも特にここ数年、何をするのにも現金が必要になっているそうです。特に現金が必要なのは、4月（除草剤を使う前）、9月（子どもの学校が始まる前）、そして12月（お正月の前）の3回だそうです。その他、病気になった時の治療費は特に大変だそうです。

刺繍をしているのは少女から年配まですべての女性たち。赤ん坊が寝ている横で刺繍をするお母さん、お母さんと一緒に刺繍する娘など、家族でおしゃべりしながらやっています。女性たちは、農作業や家事の隙間をぬって、刺繍品を作っているそうですが、最近は電気があるので夜遅くまですることもあるそうです。すっかり日に焼けた彼女たちの顔からも農作業の大変さがうかがえるのですが、畑に持って行ってその合間に作ることもあると聞きびっくり。それでも「刺繍をするのは好き」「次はどんな色にしようかなと考える時が楽しい」と話す彼女たちの笑顔に少しほっとしました。古くからモン族に伝わる美しい刺繍。子どもたちのため、家族のために……と一生懸命作った彼女たちの刺繍品を地球の木でも応援していきたいと思います。

（事務局長 筒井由紀子）



刺繍をする女性たち



サルバジット・ラマ

「開発」の解釈は人によって異なりますが、「開発」の目的は、すべての人がカーストやジェンダー、階級などによる差別を受けることなく、幸せに生きる機会を得ることにあると思います。

「開発」はその土地固有の伝統、生態学的なバランス、規範や価値を破壊するものであってはなりません。世界には、経済面、物質面で大きな開発を成し遂げた国が多くありますが、「開発」によって文化が失われ、社会の絆が希薄になって、結局、人々は幸せではなくなっています。私にとって、これは本当の「開発」ではありません。「開発」は、インフラの成長と経済、社会、文化的側面の間のバランスがとれていなければならないからです。人々の顔が幸せで輝きを増し、心が躍るような開発を目指すべきです。このような理想的な開発は、地域の人たち自らが主体的に村の発展に取り組む時に初めて実現します。そして、外部者が「村人主体の開発」という概念を理解して、それを支えるために手を貸す時に初めて可能になるのです。

私は、SAGUNの「開発」に対する考え方が私の考えと多くの点で共通していることに気づき、マンガルタールプログラムに参加してほしいというSAGUNからの要請を受諾しました。SAGUNは、マンガルタールでの活動を「開発プロジェクト」とは呼ばずに、「マンガルタールの人々との幸せ分かち合い」と呼んでいます。この呼び方に私は魅了され、コーディネータとして参加することにしました。

私たちSAGUNのメンバーは、マンガルタール村の人たちの中に溶け込むまでに多くの時間を使ってきました。私たちは決して村人たちを「受益者」とはみなしません。私たちは、共に活動することを通じて互いに幸せを分かち合う「パートナー」なのです。村人たちが協力し、ともに考え、マンガルタール村をよりよい、より幸せな村にするためのアイデアを生み出すことを私たちはいつも望んでいました。ですから、私たちは、村人たちが委員会を作るのを手助けしました。この委員会の主導のもとに、さまざまな活動が生まれ、村人たちが集って、知恵を出し合い、自分たちの社会を向上させるための計画を練るのです。

マンガルタール村の人々と私たちSAGUNは協力して、「奨学生制度」や「生活改善プログラム」を通じた、村の貧しい家庭の支援を行っています。図書室が完成し、学生たちの学習環境が整い、青少年の能力向上のための様々なトレーニングに力を入れています。村の若者たちは年4回季刊誌を発行し、地域の人々の考えや経験を紹介します。また、教師がもっと上手に教え、生徒がもっと効果的に学習することができるよう、教師と生徒を対象としたスキルアップ・トレーニングも行いました。このように、私たちはアイデアを交換しながらプログラムを進めてきましたが、実は、そうする中で私たちは互いに幸せを分かち合ってきたのでした。そして、最も重要なのが、プログラム・パートナーとして地球の木の果たした役割です。地球の木の参加は「幸せ分かち合いムーブメント」にとって大きな推進力となっています。

10月15日（土）、現地コーディネータのサルバジットさんを横浜にお招きしてお話を伺います。「幸せ分かち合いムーブメント」の手法は、地域活動、家庭や学校でも応用できます。詳細は、ちらしをご覧ください。

東日本大震災 復興支援報告

2011年度は、現在まで次のような支援を行ってまいりました。これからも現地と十分な打ち合わせをしながら、息の長い支援を続けていくつもりです。

- 4/7 現地訪問 女川町
生野菜、果物等を避難所へ持参
5/11 現地視察 石巻・気仙沼
キャッシュ・フォー・ワークの視察
5/18 現地視察・打ち合わせ 気仙沼
避難所を訪問、炊き出しの打ち合わせ
5/19 支援金送金
60万円 キャッシュ・フォー・ワークへ
5/25 第1回炊き出し 興福寺 (50食)
シュウマイ、棒棒鳥、コーンスープ、杏仁豆腐

6/5 第2回炊き出し
鹿折小学校 (100食)



ビーフン、大根スープ、
中華チマキ、中華えびせん

6/26 支援物資送付



タオルケット250枚
夏物衣料約600点

6/11 第3回炊き出し
中才保育所 (200食)



野菜や豆などの入ったトマト煮ごはん、
バレンシアオレンジ

6/18 第4回炊き出し
気仙沼小学校 (500食)



豚まん、チキンスティック、
マンゴープリン

7/2 第5回炊き出し
階上小学校 (300食)



冷やし中華、白玉フルーツ

「生活クラブ40・30まつり」で 地球の木アピール

生活クラブ40周年、デポー30周年の記念事業のひとつである催しに、地球の木もデポーに招かれ、マジカルバナナのクイズ、地球の木の活動紹介、クラフト品の販売などを行いました。

7月7～10日の4日間、暑い中でしたが、県内7カ所のデポーに理事たちはじめ、ボランティアの会員たちが延べ14名出向き、この機会に少しでも多くの人に「地球の木」をアピールしようと一生懸命取り組みました。立ち寄ってくれた人たちに、短い時間でクイズを出しながら民衆交易のバナナの話をし、地球の木の活動まで伝え、クラフトの紹介をするのは、なかなか大忙しでした。しかし、それぞれのデポーで多くの人たちと話ができて、クラフト販売も順調にいき、今後のデポーとのつながりにも、何か所かで明るい展望が見えたことは、うれしい成果でした。(会報作成チーム・沼田由美子)



マジカルバナナのクイズをする

孝道山「復興支援チヂミ」作りに参加

8月13、14日「孝道山盆おどり」で「復興支援チヂミ」を作り、販売しました。今回作ったチヂミ材料の小麦粉は、会員の山本さんたちの畑で収穫し、復興の為に提供された有機、無農薬の物です。孝道山は「地球の木」の団体会員で、今回依頼を受け参加しました。孝道山本堂前庭の中央に立派な櫓が組み、今年、東日本大震災で亡くなられた方のご供養の意味も込めての踊り「よさこいソーラン」は老若男女、心を一つに一生懸命踊っていて感動しました。夕涼みを兼ねた浴衣姿の親子連れも多く、「チヂミは初めて」「復興支援になるなら」と次々と客がおとずれ「美味しい」と好評でした。13日にはIVY気仙沼で活動する若者も合流し、私達も実際に顔が見えた応援ができた事を嬉しく思い、これからも支援したいと感じました。(ランチ連絡会 豊田由紀子)



IVY気仙沼の若者たちと



～わがりやすく、楽しく～
「マジカルバナナ」小学生バージョンを作成

県内のある小学校の先生から出前講座(ワークショップ)の依頼が来ました。その内容は、「子どもたちが食品を購入する時に、安いだけではなく、その裏にある生産者のことや安全のことを考えられる消費者としての視点を持つようにしたい」というものでした。

私たち地球の木では、12年前にマジカルバナナの教材作成をして以来、中・高生や一般の人たちなどに向けて何回もワークショップを実践してきましたが、小学生に対して「あったことがほとんどないので、最初は少々ためらいがありました。しかし、未来の消費者としての芽を育てようという学校側の熱意に応えようと、出前講座チームが一丸となって検討を開始しました。自分たちが小学生になったつもりで、全体の流れ、発問の仕方、クイズ、解説内容、ミニお芝居などに関して、何回も会合を開き、分かりやすく、楽しく参加できるようなものへと納得いくまで話し合いを重ねて仕上げたのでした。

「グループ分けをどうするか」から始まり、「アイスブレイキングは?」「買物ランキングは?」「導入のクイズは?」「ミニお芝居は?」「2種類のバナナの試食は?」などなど。順次見直しを行いました。

特に留意したのは、メインになるミニお芝居でした。「つとむ君の家族」(日本の消費者)を独立させて最初に入れ、「バナナ農園で働く人びと」、「バナナ村で暮らす人びと」を対比させ、言葉遣いにも配慮して、かなりセリフの手直しをしました。

実際演じる時には、配役はすぐ決まり、風邪をひいてマスクをしている子も「大きな声が出ます」と言って積極的に参加し、大半がワークショップの展開を楽しんでくれました。反応は中学生よりも良く、演じた後の感想や話し合いも子どもらしい率直なものが多く出ました。このミニお芝居の浸透具合で、「ワークショップがうまくいったかどうか」がわかると感じました。

まとめとして子どもたちが書く「振り返りシート」も重要でした。今後、食品を購入する際に、「作る人の立場にな

って」と「買う側の立場になって」を、考えるきっかけになるように工夫した結果、こちらの意図するものがかなり伝えられたと思います。講座を依頼してきた先生は、「これをきっかけに子どもたちが『安い』とはどういうことなのか、食べ物を作っている人はどこにいて、どんな生活を送り、どんなことを願っているのか、少しでも考える人になってほしい」と感想をのべてくれました。

新しいことへの挑戦は、私たちにとっても張り合いのある楽しいものでした。今後も更に実践を重ね、より良いものにしていきたいと願っています。

(出前講座チーム・山崎信子)

地球の木20周年記念 連続講座 分かち合う暮らし —世界のひとびとと、次の世代と—

設立20周年を記念し、連続講座を企画しました。3.11の後、これからの私たちの暮らし方、地域のあり方、そして「もう一つの」経済やエネルギーを考える場です。ぜひご参加ください。

第1回 対談と笛のコンサート

テーマ: 幸せを分かち合う地域づくり
～ネパール、ラダック、日本～
対 談: サルバジット・ラマさん(SAGUNスタッフ)
鎌田陽司さん(NPO法人 懐かしい未来 代表理事)
日 時: 10月15日(土) 午後1:00～4:00
場 所: 横浜にぎわい座B2F のげシャレ(小ホール)
参加費: 1,000円(お茶とお菓子付)

第2回 トークイベント

テーマ: いきいきと生きるための「経済」
講 師: 内田聖子さん(NPO法人アジア太平洋資料センター 事務局長)
日 時: 12月10日(土) 午後1:30～4:00
場 所: 開港記念会館(予定)
参加費: 500円
内 容: もうひとつの経済のあり方、「連帯経済」

第3回 トークイベントと20周年記念パーティー

テーマ: 飯館村から考える地産地消のエネルギーと原発
講 師: 大嶋朝香さん(地域エネルギー協議会 代表)
浦上健司さん(飯館村後方支援チーム、日本大学 生物資源科学部研究員)
日 時: 2月4日(土)
場 所: オルタ館(予定)

活動日誌(6月～8月抜粋)

- 6月 4日 フォーラムアソシエ総会出席
5日 YNN設立10周年イベント パネリスト
第2回気仙沼炊き出し(鹿折小学校)
10日 生活クラブ総代会出席
11日 第3回気仙沼炊き出し(中才保育所)
14日 第2回理事会
18日 鎌倉女学院高校国際セミナー「ネパール」
第4回気仙沼炊き出し(気仙沼小学校)
24日 JANIC総会出席
25日 東日本大震災緊急支援報告会
28日～7/5 カンボジア訪問
30日 第1回ランチ連絡会

*各チームミーティングが毎月行われています。

- 7月 2日 第5回気仙沼炊き出し(階上小学校)
真光寺中学校出前講座「マジカルバナナ」
7～10日 生活クラブ40・30まつり参加(7デポー)
21日 第3回理事会
26日 第2回ランチ連絡会
8月 6～7日 第29回開発教育全国研究会 出席
6日 自主ラウンドテーブル「小学生と一緒にマジカルバナナ」
9日 第4回理事会
13～14日 孝道山盆踊りチヂミ販売で参加
18日 第3回ランチ連絡会
26日 がんばるママのごほうび講座「マジカルバナナ」(伊勢原)



地球の木カレンダー2012「いのちの輝き」

写 真：松尾 純（アジアの写真14点）
 サイズ：28cm×38.5cm（使用時56cm×38.5cm）
 印 刷：オールカラー、大豆インク
 特 性：日付が大きく見やすい。書き込みがしやすい
 前月と翌月のカレンダー付き。「月の満ち欠け」を表示
 制作・販売元：日本国際ボランティアセンター（JVC）
 ※FAXでご注文の方は、同封の申込み用紙をご利用ください。

グローバルフェスタ2011

日本で最大のNGOのお祭りです。今年のテーマは「絆」
 日 時：10月1日（土）・2日（日）10：00～17：00
 場 所：日比谷公園（地下鉄丸ノ内線・千代田線「霞ヶ関」、地下鉄日比谷線「日比谷」徒歩2分、JR「有楽町」徒歩8分）

地球の木は「チヂミ」と支援地のグッズ販売をいたします。
 当日お手伝いしてくれる方を募集しています。

磯子国際交流フェスティバル

日 時：10月8日（土）10：00～15：00
 場 所：磯子区役所 屋外駐車場&1階ロビー
 （JR根岸線「磯子駅」徒歩3分）

ダンス・音楽や写真コンテスト、外国人のトーク・ショーもあります。世界のグルメ&グッズでは、地球の木も「チャパティ ドライカレー」とチャイで出店します。

地球の木20周年記念 連続講座

「分かち合うくらし」第1回

サルバジット・ラマさんの対談と笛のコンサート
 テーマ：幸せを分かち合う地域づくり
 ～ネパール、ラダック、日本～
 対談相手：鎌田陽司さん（NPO法人 懐かしい未来 代表理事）
 日 時：10月15日（土）1：00～4：00
 場 所：横浜にぎわい座 B2F のげシャール
 （JR・市営地下鉄「桜木町」駅徒歩3分、京浜急行線「日ノ出町」駅徒歩7分）
 参加費：1,000円
 内 容：サルバジット・ラマさんからは、幸せを分かち合う村づくりについて、鎌田さんからは、ラダックや小川町での「ローカリゼーション」を目指した事例を紹介してもらい、私たち自身の地域のあり方を考えます。サルバジットさんの笛の演奏もお楽しみください。

よこはま国際フェスタ2011

日 時：10月22日（土）・23日（日）10：30～17：00
 会 場：象の鼻パークBゾーン、波止場会館
 （みなとみらい線「日本大通り駅」徒歩5分
 JR/横浜市営地下鉄「関内駅」徒歩15分）

国際協力に関わる団体の活動紹介やフェアトレード品や様々な国の料理を販売します。地球の木は、グッズの販売で参加します。

フォーラムアソシエ文化祭

日 時：10月29日（土）11：00～15：00
 場 所：オルタ館（JR/横浜市営地下鉄「新横浜駅」徒歩7分）
 地球の木は「アジアの手仕事展」を開催します。

鎌倉国際交流フェスティバル

日 時：11月6日（日）9：45～15：00
 場 所：高德院（鎌倉大仏）（江ノ島電鉄「長谷駅」徒歩7分）
 地球の木の活動紹介、アジアのコーヒーやグッズの販売をします。

地球の木ワークショップ「援助する前に考えよう」

国際協力募金に寄付したあなた！海外でボランティアしたいあなた！「援助」する前に考えよう！
 日 時：11月19日（土）10：00～12：00
 場 所：ひらつか市民活動センター（JR「平塚駅」徒歩2分）
 ＊このワークショップは、平塚市との共催事業です。

地球の木 ネパール・スタディツアー2011秋 …幸せの原点をたずねる旅…

「幸せ分かち合いムーブメント」の現場を訪問します。
 今年は秋に実施。壮大なヒマラヤ山脈が望めます。
 日 時：10月29日（土）～11月6日（日）東京発着8泊9日
 訪問地：ネパール カトマンズ、カブレ郡マンガルタル村ほか
 参加費：23万円（航空券、諸税、ビザ、宿泊、食事、現地交通費、プログラム費を含む）
 会員でない方は初年度会費が必要となります。
 対 象：テーマに関心のある健康な人
 説明会：9月17日（土）10：30～12：00地球の木事務所
 募集人数：10名（最少催行人員4名）
 募集締切：2011年9月30日
 旅行企画：風の旅行社
 現地プログラム企画：地球の木
 申込・問合せ：地球の木
 ＊詳しくは同封のちらしをご覧ください。

あーすフェスタかながわ2011

日 時：11月26日（土）、27日（日）
 場 所：あーすぶらざ（JR本郷台駅徒歩3分）
 地球の木は実行委員会として参加。今回は11月と来年5月に開催予定で、準備をしています。

地球の木は「認定NPO法人」格を取得しました

2010年7月16日以降のご寄付に関しては、皆様が確定申告で寄付金を所得控除できるようになります。
 また、神奈川県と横浜市の個人住民税からも控除となります。